

## 栄光と美を表わす大祭司の聖なる装束



### ベレーシート

●これまで幕屋について学んできましたが、この幕屋になくてはならないのが祭司の存在です。これからしばらくの間、祭司たちが着る聖なる装束(祭服)について、その一つひとつを取り上げて学んでいきたいと思います。左図は、大祭司だけが着る「栄光と美を表わす聖なる装束」です。衣服の素材もデザインも、すべて神が指定されたものです。幕屋の一つ一つのパーツにも深い真理が隠されていたように、聖なる装束の一つひとつにも神の真理が隠されています。シリーズ「栄光と美を表わす聖なる装束」を通して、それを発見して行きたいと願っています。

### 1. 祭司職の家系

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 28章 1節

- 1 あなたは、イスラエル人の中から、あなたの兄弟アロンとその子、すなわち、アロンとその子のナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを、あなたのそばに近づけ、祭司としてわたしに仕えさせよ。

#### (1) アロンとその息子たち

●祭司の務めはアロンの家系に限られています。同じレビ族であっても、モーセの家系とは切り離されています。このことは、律法の下にある祭司職とキリストをかしらとする祭司職との違いを示唆する「型」となっています。ちなみに、キリストの祭司職はアロンの家系とは異なるメルキゼデクの流れを引き継いでいます。A.D.70年、ローマによってエルサレムの神殿が崩壊して以後、大祭司アロンの家系は日の目を見なくなりました。

●さて、モーセは彼の肉親である兄アロンが大祭司となるように主からの指示を与えられました。大祭司アロンには四人の息子たち「ナダブとアビフ、エルアザルとイタマル」がいました。大祭司アロンは常に息子たちと一緒になければその務めをすることができませんでしたし、彼の息子たちも大祭司である父のアロンがいなければその務めをすることはできませんでした。彼らは常に一つなのです。

#### (2) 名前の中に秘められたメッセージ

●父アロンを筆頭とするその息子たちの名前の中に、神の深いメッセージが込められています。

- (1) アロン(「アハローン」 אֲהֲרֹן)・・・「非常に高い」(ユダヤの伝承によれば)

- (2) ナダブ(「ナーダーヴ」 נָדָב)・・・「喜んで、自発的に」
- (3) アビブ(「アヴィーフー」 אַבִּיבוֹא)・・・「彼は私の父である」
- (4) エルアザル(「エルアーザール」 אֶלְעָזָר)・・・「神の助け」
- (5) イタマル(「イーターマール」 אֵיתָמָר)・・・「なつめやしの地」

●上記の名前に込められた意味をつなげてみると、「いと高き方は喜んで自ら御父に従う。御父は彼を助けてやがて多くの実を結ばせる」というメッセージが浮かび上がって来ます。ところが、息子のナダブとアビブが父の許可なく祭司としての務めをしたために、主によってさばかれて死んでしまうという出来事が起こりました(レビ記 10 章)。この出来事はアロンの祭司としての家系が別の者にとって代わられることを暗示しているようにも見えます。

●ちなみに、アロンは 123 歳で死にましたので、アロンは 40 年の間、大祭司としての地位にいたことが分かります(アロンはモーセより 3 歳年上でした)。第一子のナダブと第二子のアビブが死んだために、大祭司のアロンの聖なる装束を受け継ぐことになったのは第三子の「エルアザル」でした。

### (3) 栄光と美を表わす大祭司の聖なる装束

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 28 章 2～4 節

- 2 また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。
- 3 あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなければならぬ。彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせるためである。
- 4 彼らが作らなければならない装束は次のとおりである。胸当て、エポデ、青服、市松模様の長服、かぶり物、飾り帯。彼らは、あなたの兄弟アロンとその子らに、わたしのために祭司の務めをさせるため、この聖なる装束を作らなければならない。

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 28 章 39～40 節

- 39 亜麻布で市松模様の長服を作り、亜麻布でかぶり物を作る。飾り帯は刺繍して作らなければならない。
- 40 あなたはアロンの子らのために長服を作り、また彼らのために飾り帯を作り、彼らのために、栄光と美を表すターバンを作らなければならない。

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 29 章 5～6 節

- 5 あなたは、装束を取り、アロンに長服とエポデの下に着る青服と、エポデと胸当てとを着せ、エポデのあや織りの帯を締めさせる。
- 6 彼の頭にかぶり物をかぶらせ、そのかぶり物の上に、聖別の記章を掛ける。

●上記の記述から、大祭司の聖なる装束は七つの部分からなっていることが分かります。大祭司の装束は「栄光と美を表わす装束」、あるいは「聖なる飾り物」(「ハドゥラット・コーデシュ」 הַדְּרֹתֵי־קֹדֶשׁ)とも言われ、息子の祭司の着るものとは異なっていました。大祭司の装束は以下の通りです。

# בגדי־קֹדֶשׁ

- ①「ももひき」②「長服(下服)」③「長服を結ぶ帯」④「青の上服」⑤「エポデ」⑥「ターバン(かぶり物)」  
⑦「胸当て」の七つのパーツから成っています。



●祭司は神によって選ばれる(召される)だけでなく、その務めにふさわしい服を身に着けなければなりません。大祭司もその息子たちも同様です。祭司たちの着る「聖なる装束」はさまざまな部分からなります。神の啓示の順序は、外側の部分(エポデ)から語られていきますが、私たちは最後に語られる部分、つまり目に見えない部分である「裸をおおう亜麻布のももひき」から始めたいと思います。 「ももひき」(新改訳)ということばは年配の人は知っていますが、今の若者は知らないと思います。それは腰から腿のあたりまでをおおう下着のことです。現代的な表現をするなら、水泳選手が身に着ける**ロングパンツ**(右図)をイメージすると良いと思います。そのロングパンツは身体に密着するものでなくてはなりません。祭司たちの着る下着も同様に身体に密着するものでした。ただその素材が白い亜麻布でなければなりません。なぜなら、白い「亜麻布」は**神の義を象徴**するものだからです。



## 2. 亜麻布のももひき (装束 その一)

- そこでまず、この「裸をおおう亜麻布のももひき」について記述されている箇所を見たいと思います。

### (1)【新改訳改訂第3版】出エジプト記 28章 42~43節

42 彼らのために、裸をおおう亜麻布のももひきを作れ。腰からももにまで届くようにしなければならぬ。

43 アロンとその子らは、会見の天幕に入るとき、あるいは聖所で務めを行うために祭壇に近づくとき、これを着る。彼らが咎を負って、死ぬことのないためである。これは、彼と彼の後の子孫のための永遠のおきてである。

### (2)【新改訳改訂第3版】出エジプト記 39章 28節

亜麻布でかぶり物と、亜麻布で美しいターバンと、撚り糸で織った亜麻布でももひきを作った。



- 「ももひき」と訳されたヘブル語は「ミフネセー」(מִפְּנֵסַי)で、「集める(Piel)、身をくるむ(Hith)」と

いう意味の動詞「カーナス」(כָּנַס)を語源としています。「ももひき」は腰から腿までの肌を覆い隠すためのものです。素材となる亜麻布は「ヴァド」(בַּד)、あるいは「バド」(בָּד)が使われていますが、亜麻布を表わすもう一つの語彙に「シェーシュ」(שֵׁשׁוּ)があります。「シェーシュ」は良質の亜麻布のことで、織り目の細かい亜麻布であることを意味しています。そのために「ももひき」が肌に密着するのです。

●出エジプト記 39 章 28 節には「撚り糸で織った亜麻布でももひきを作った。」とあります。原文では、「撚られた亜麻糸で織られた亜麻布のももひき」(「ミフネセー・ハッパード・シェーシュ・モシュザール」(מִשְׁזָרַל מִשֵּׁשׁוּ הַבָּד מִכְּנָסֵי הַבָּד))とあり、「ミフネセー・ハッパード」(מִכְּנָסֵי הַבָּד) で「亜麻布のももひき」(新改訳)と訳され、新共同訳では「ズボン」、口語訳では「下ばき」、NKJV では「short trousers」、NIV では「the undergarments」と訳されています。

### (1) なにゆえに、「腰から腿まで」をおおわなければならないのか

●なぜ、大祭司、および祭司たちが「会見の天幕に入るとき、あるいは聖所で務めを行うために祭壇に近づくとき、これを着る」ことが規定されているのでしょうか。それは、「彼らが咎を負って、死ぬことのないため」なのです(出 28:43)。しかしなぜ、「亜麻布のももひき」を着ないと死ぬのでしょうか。しかもその「ももひき」が「腰からももにまで」届くようにしなければならなかったその理由とは何なのでしょう。その問いかけについて考えて見なければなりません。

●エデンの園に罪が入ってきたことによってもたらされた最初の結果は、人が自分自身の裸に気づいたことでした。

【新改訳改訂第3版】創世記 3 章 7 節

このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

●アダムが主から命じられた二つの務め、その一つは「耕すこと」で、もう一つは「守る」という務めでした。特に後者の「守る」というのは「区別する」という務めです。良いものと悪いもの、きよいものと汚れたもの、いのちと死など・・・。蛇の誘惑によって、神の基準による区別の務めを果たすことができなくなったアダムとその妻にもたらされたものは、以下の三つのことです。

#### ① 「目が開かれたこと」

●善悪の知識の木の実を取って食べたことで、サタンが言ったように目が開かれました。サタンは嘘を言っていなかったのです。しかし「目が開かれる」ということは、神の視点とは異なる視点でものごとを見るようになったことを意味しています。

#### ② 「自分たちが裸であることを知ったこと」

●その結果、「自分が裸であることを知った」のです。人は初めから裸でしたが、今や新しい目で見た「裸」

です。それは自分の愚かさ、醜さ、恥ずべき自分の気づきとしての「裸」です。

### ③「彼らはいちじくの葉をつづり合わせて、腰のおおい(腰帯)を作ったこと」

●目が開かれて、自分たちが裸であることを知った二人は、いちじくの葉をつづり合わせて、腰のおおい(腰帯)を作りました。それはお互いの裸を隠すためでした。つまり、彼らは裸であることができなくなったのです。それは神に対しても、自分のパートナーに対しても、そして自分に対しても、真の自分の姿を隠さなければならない存在になってしまったことを意味します。換言するなら、罪を犯したあるがままの自分をさらけ出すことができない現実、これが「裸であることを知った」という意味なのです。

●彼らはお互いに自分の裸を隠すために、いちじくの葉をつづり合わせて腰のおおいを作りましたが、果たしてそれで十分であったのは思われません。どうかは分かりません。彼らがと自分の裸をいちじくの葉で隠そうとしたのは、単に、性的な羞恥心というよりは、神に対する裸の自覚です。つまり、それは自分の理性や意志によっては制御できない自分の愚かさ、醜さを隠そうとする象徴的な行為であったということです。その証拠に「神の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した」という行為の理由を、「私は裸なので、恐れて、隠れました」と弁明しています。「恐れ」という感情と「隠れる」という行為は自分が裸であることに気づいた結果です。神は追究されます。「あなたが裸であることを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」という詰問にアダムは隠し切れなくなり、そのため、彼は弁解をし、自分を正当化することに心を奪われ、責任転嫁をしてしまいます。ここに、本来の人間の尊厳性を失った裸になれない惨めな姿、ますます「深い淵」に陥っていく人間の脆い姿が露呈されています。

## (2) 聖書が意味する「腰」の象徴的意味

●祭司たちの装束の中で、なにゆえに、腰の部分をおおう「ももひき」を着る(はく)必要があったのでしょうか。そのことを考えるためには、「腰」について聖書がどのように語っているかを調べる必要があります。「腰」に関するヘブル語は以下のように三つあります。

### ①「モトウナイム」(מֹתוּנַיִם)・・・47回

●この語彙は、身体の部位における文字通りの「腰」を意味しますが、と同時に、「腰の帯を引き締め」「腰に帯をする」と表現されると、「準備ができていること、心構えができていること」を意味します。あるいは、いつでも出発できる、いつでも戦うことができているという「心の備え」の象徴的表現となります。これは新約聖書にも受け継がれ、「ですから、あなたがたは、心を引き締め(=心という腰に帯を締め)、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」(Iペテロ 1:13)という終末論的待望の姿勢となります。

### ②「ハラーツァイム」(חֲלָצַיִם)・・・11回。「ヘレツ」(חֶלֶץ)の双数形

●初出箇所【新改訳改訂第3版】創世記 35章 11節

神はまた彼に仰せられた。「わたしは全能の神である。生めよ。ふえよ。一つの国民、諸国の民のつどいが、あなたから出て、王たちがあなたの腰から出る。(口語訳は「身」と訳している)

- ここでの「腰」は**生殖力のやどるところとされる、生命の泉の象徴**です。「腰から出る」というのは、その人の血を引くという意味。つまり、その男から生まれたという婉曲的表現。同じ意味の例として、

【新改訳改訂第3版】I列王記 8章 19節

しかし、あなたがその宮を建ててはならない。あなたの腰から出るあなたの子どもが、わたしの名のために宮を建てる。

- また、「腰」を意味する「ハーツァイム」(רֵצֵף)には、その人の「身」(からだ全体)という意味で使われることもあります。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 32章 11節

のんきな女たちよ。おののけ。うめぼれている女たちよ。わななけ。着物を脱ぎ、裸になり、腰に荒布をまとえ。

- ここでの「腰に荒布をまとえ」とは、間近に迫っている災いに備えて、直ちに「喪服」を身に着るように勧めている箇所。そしてそのような服装をして、真の悔い改めを示せと語っている。つまり、「腰」と「身」は同義なのです。

### ③ 「ヤーレーフ」(יָרֵף)・・・34回

- 実は、この語彙こそ祭司たちが「ももひき」を着ることと深く関連して重要です。以下の箇所では「腰」が「もも」と訳されています。

この語の初出箇所【新改訳改訂第3版】創世記 24章 2節

そのころ、アブラハムは、自分の全財産を管理している家の最年長のしもべに、こう言った。『あなたの手を私のもも(יָרֵף)の下に入れてくれ。』

- 誓いを立てる際に、誓いの相手の腰(腿・股)の間に手を入れました。この場合の「腰」(腿・股)は**生殖器部位の婉曲的表現**です。この誓いの形式のユダヤ的な意義は、割礼によって神との間に結ばれた契約を相手に想起させ、自らの誓いの神聖さを裏づけるという点にあります。

a. 【新改訳改訂第3版】創世紀 47章 29節

イスラエルに死ぬべき日が近づいたとき、その子ヨセフを呼び寄せて言った。「もしあなたの心にかなうなら、どうかあなたの手を私のももの下に入れ、私に愛と真実を尽くしてくれ。どうか私をエジプトの地に葬らないでくれ。

b. 【新改訳改訂第3版】創世記 32章 25節

ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのもものつがいを打ったので、その人と格闘して

いるうちに、ヤコブのもものつがいはずれた。

c. 【新改訳改訂第3版】創世記 32 章 31～32 節

彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に上ったが、彼はそのもものために足を引きずっていた。それゆえ、イスラエル人は、今日まで、もものつがいの上の腰の筋肉を食べない。あの人（ヤコブ）がもものつがい、腰の筋肉を打ったからである。

●ここでの「もも」は**人間の生来の力の象徴**である。その力は自我の力です。御使いはヤコブの自我の力の余りに強いのに根負けして、彼のもものつがい、すなわち、ヤコブの生来の力を砕くことでヤコブが神にのみ頼らざるを得ないようにされたのです。

## ベアハリート

●かなり説明が長くなりましたが、なぜ祭司たちが腰からももにかけて、そこをおおう「ももひき」をかく必要があったのか、その答えは、**祭司の務めが人間の生来の力によってなされないため**でした。人間的な常識や判断による務めではなく、すべて神の指示に従ってなされなければならなかったのです。特に、人の目に触れない部分において、人間の生来の力が制御されるべきことを祭司自らが十分に心に留めていなければならなかったのです。

●さらにもう一つ、祭司たちが「亜麻布のももひき」を着る必要がありました。それは、**祭司たちが良心の呵責なく仕えるため**です。祭司たちの仕事は神の近くで仕える者たちです。その彼らがなんら良心の呵責なく仕えるためには、自分の罪に対する咎めや恐れから解放されていなければ、その仕事をすることはできません。神に近くであればあるほど、自分が裸であること、隠さなければならない惨めな者であることを気づかせられるのです。そこで、神が彼らに「亜麻布のももひき」を着させたのは、彼らのみじめな裸を隠し、仕える者の心に安心を与えるためでもあったのです。祭司の働きは、時にはかかんだり、しゃがんだりする姿勢を取らなければならないこともあったはずですが、そうした際に、覆われているはずの恥ずべき部分が人に丸見えになることを神は避けさせたのだと考えます。「亜麻布のももひき」、それは神の義の衣、救いの衣です。それを身に着けることで、初めて祭司としての務めを果たすことができるのです。これは神の恩寵なのです。

●今回から始まった大祭司の「聖なる装束」についてのメッセージは、祭司職を与えられたアロンとその息子たちのためのものではありません。詩篇 96 篇 9 節に「聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。・・・」とあります。「聖なる飾り物」とは祭司の装束です。それゆえ、主にある者たちは祭司の装束に隠されている永遠の真理を知る必要があるのです。そのために、神を知るための知恵と啓示の御霊が豊かに与えられるように祈りたいと思います。

2016.7.31